



初めての学校訪問（1年次生）



未来からの留学生



高松沖浪裏

香川大学教育学部 附属教職支援開発センター センターニュース

No.12



穏やかな夕刻



「子ども理解」演習（2年次生）



教育実習

PICK UP NEWS

小豆島一日研修 ～『二十四の瞳』と出会い、感じ、考える学習～

教育学部1年次「大学入門ゼミ」の授業の一環として、2024年5月11日（土）・12日（日）、「小豆島一日研修」（日帰り）を実施しました。全6クラスの1年次生を3クラスずつ2日間に分け、計167名の1年次生が本研修に参加しました。

高松港からフェリーに乗船し、池田港から大型バスで、主たる研修場所である、壺井栄の小説『二十四の瞳』の舞台となった岬の分教場ならびに二十四の瞳映画村に向かいました。二十四の瞳映画村にある「壺井栄文学館」で壺井栄の生涯について知り、小説『二十四の瞳』の生原稿（レプリカ・原物は文学館蔵）などを目にした上で、壺井栄文学館の館長先生よりご講話をいただきました。館長先生は香川大学のご出身であり、長く香川県の学校教員としてご活躍された方です。壺井栄が『二十四の瞳』に込めた思いに対する思いに関するご講話とともに、大学の先輩・学校教員の先輩として、後輩であり学校教員を目指す大学1年次生に、教育の未来を託す熱いエールをいただきました。

この「小豆島一日研修」は、1年次生の大学における人間関係づくりのねらいもあります。午後に立ち寄った道の駅小豆島オリーブ公園には、クラス単位で園内を散策しながら、ほうきで宙を舞う写真を撮影したり、ハート型のオリーブの葉を探したりと、仲間との楽しい時間を過ごす学生たちの姿がありました。

ちなみに研修の昼食には、小豆島のお弁当屋さんが本研修のために考案した「小豆島の恵み満載！弁当」を供しました。小豆島の醤油もろみソースがかかった鶏もも肉のステーキや、小豆島の学校給食でも提供されている小豆島産鯛の唐揚げ、オリーブ素麺など、まさに「小豆島の恵み満載！」のメニューを詰め込んだお弁当です。

学生たちは二十四の瞳映画村の海辺で、瀬戸の潮風を感じながら、五感で小豆島を味わっていました。



- ◆センター長あいさつ／令和6年度 附属教職支援開発センター 事業計画／令和5年度 センター日誌 2
- 【特集】 学部教員と附属学校園教員の協働による研究活動 3
- 学部教員と附属学校園教員の協働による研究活動 研究グループ報告 3～5
- ◆令和5年度 教育実践集中講座 実践報告 6
- ◆教員採用試験に挑む学生に、日々の指導で力添えを。／交流教員から見た学校教育教員養成の今・これから 7
- ◆附属坂出小学校 合同研究集会報告／令和5年度 国立大学教育実践研究関連センター協議会 報告 8
- ◆附属学校園 この1年 ～2023～ 9～12
- ◆教育実践総合研究（第50・51号）原稿募集 12

センター長 あいさつ

関係各位におかれましては、お忙しい毎日をお過ごしのことと拝察いたします。日頃より本センターの事業にご支援・ご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

本センターでは、色々な事業が展開されています。従来、①実地教育推進、②教職支援推進、③教員研修推進、④教育開発/ICT推進の4部門で事業を進めておりましたが、特別支援教室「すばる」の坂出から幸町キャンパスへの移転となり、それに伴って、2022年4月に⑤特別支援教育推進部門が設置され、5部門の体制になりました。多様性の時代と言われるものの、センターの多様性を、教員養成や教員育成などに関する教育や研究及び事業をどのように反映させるのか、どのように更なる発展させてゆければ良いのか、まだ模索は続けております。

センターニュースNo.11でもご紹介したように、2022年9月の火災後、多くの方々のご支援・ご協力を得て、2023年4月に事務室は再開され、5月には火災前の状況に復帰いたしました。多くの方々に多大なご心配やご迷惑をおかけしました。再度、お詫びを申し上げます。

センター内外の状況は大きく変わってきておりますが、従来からの事業を継続し、新たな課題に挑戦して、教育や研究に関する貢献を行う所存であることには変わりありません。今後とも附属教職支援開発センターに、ご支援・ご協力を賜りますよう心よりお願い申し上げます。



附属教職支援開発センター長
松村 雅文

令和6年度 附属教職支援開発センター 事業計画

1 実地教育推進部門（実地教育に関する管理及び運営）

- 「大学入門ゼミ」「教職概論」（1年次）
- 「教育実践プレ演習」（2年次）
- 「教育実践演習」（事前事後指導）（3年次）
- 「保育・教職実践演習」（4年次）

2 教職支援推進部門（教職支援に関する管理及び運営）

- 教職志望学生への日常的支援活動
・説明会、自主サークルへの支援、願書作成、卒業前対策講座等教授対応
- 教職志望学生及び現職教員への教育相談活動
・進路に関する相談、教職に関わる悩み等相談活動
- 教育実践集中講座の開催

3 教員研修推進部門（現職教員研修に関する管理及び運営）

- 現職教員への研修支援活動
・香川県教育センターとの連携研修
・NITS四国アライアンス（香川大学センター）連携研修
・小学校外国語のための免許法認定講習

4 教育開発/ICT推進部門（教育開発に関する管理及び運営）

- 教材・資料の収集・管理・活用支援
・研究資料の収集・管理、教材・機器等の共同利用のための整備、ソフト等の閲覧貸出
- ICT機器の活用支援
- 研究活動の報告等
・「香川大学教育実践総合研究」の編集、教育実践集中講座資料集等
- 関係機関との連携
・関係機関との連携による共同研究、附属学校園等との共同研究等

5 特別支援教育推進部門（特別支援教育に関する管理及び運営）

- 教育学研究科、教育学部における特別支援教育に関する教育活動への協力
- 特別支援教室の運営、業務の遂行
- 香川県教育委員会、高松市教育委員会、附属学校園、関係諸機関との連携

6 その他

- 広報活動
・ホームページ、センターニュース、パンフレット等
- 学部・大学院関連授業科目及び卒論・修論指導

令和5年度 センター日誌

<前期>

- 4月7日(金) 第1回教育実践プレ演習担当者会議
- 4月12日(水) 特別支援教育実践演習 第1回全体指導
- 4月13日(木) 教育実践演習 第1回全体指導
- 4月18日(火) 第1回専任会議
- 4月20日(木) 教育実践演習 第2回全体指導
- 4月26日(水) 特別支援教育実践演習 第2回全体指導
- 4月27日(木) 教育実践演習特別指導
- 5月11日(木) 教育実践演習 第3回全体指導
教育実践集中講座(第一期1回目)
教育実践集中講座(第二期2回目)
- 5月15日(月) 第2回専任会議
- 5月16日(火) 教育実践演習 第4回全体指導
- 5月18日(木) 教育実践集中講座(第一期3回目)
- 5月20日(土) 教育実践プレ演習 第1回全体授業
- 5月24日(水) 教育実践集中講座(第一期4回目)
教育実践演習 第5回全体指導
- 5月25日(木) 教育実践集中講座(第一期5回目)
- 5月29日(月) 教育実践集中講座(第一期6回目)
- 6月3日(土) 第1回編集会議
- 6月5日(月) 教育実践集中講座(第一期7回目)
- 6月12日(月) 第2回編集会議
- 6月19日(月) 第3回専任会議
- 6月20日(火) 第1回センター運営委員会
- 7月3日(月) 第4回専任会議
- 7月18日(火) 教育実践演習 第6回全体指導
- 7月20日(木) 臨時編集会議
- 7月25日(火) 第5回専任会議
- 9月13日(水) 第1回教職実践演習担当者会議
- 9月15日(金) 教育実践プレ演習 第2回全体授業
第103回国立大学教育実践研究関連センター協議会(オンライン)

<後期>

- 10月13日(金) 教育実践集中講座(第二期1回目)
- 10月17日(火) 第6回専任会議
- 10月20日(金) 教育実践集中講座(第二期2回目)
- 10月25日(水) 教育実践プレ演習 第3回全体授業
- 10月30日(月) 臨時教育実践プレ演習担当者会議
- 11月2日(木) 教育実践集中講座(第二期3回目)
- 11月6日(月) 教育実践集中講座(第二期4回目)
- 11月8日(水) 教育実践演習 第7回全体指導
- 11月9日(木) 教育実践集中講座(第二期5回目)
- 11月15日(水) 教育実践演習 第8回全体指導
教育実践集中講座(第二期6回目)
- 11月16日(木) 教育実践集中講座(第二期7回目)
- 11月21日(火) 第7回専任会議
- 11月24日(金) 教育実践集中講座(第二期8回目)
第2回教職実践演習担当者会議
- 11月27日(月) 教育実践集中講座(第二期9回目)
- 11月30日(木) 特別支援教育実践演習 第3回全体指導
教育実践集中講座(第二期10回目)
- 12月4日(月) 第3回編集会議
- 12月13日(水) 教育実践集中講座(第二期11回目)
- 12月18日(月) 第4回編集会議
- 12月19日(火) 第8回専任会議
- 1月15日(月) 教育実践集中講座(第二期12回目)
- 1月16日(火) 第9回専任会議
- 1月17日(水) 特別支援教育推進部門会議
- 1月22日(月) 教育実践集中講座(第二期13回目)
- 1月29日(月) 教育実践集中講座(第二期14回目・15回目)
- 2月5日(月) 教育実践集中講座(第二期16回目)
- 2月7日(水) 第3回教職実践演習担当者会議
- 2月13日(火) 教育実践プレ演習担当者会議
- 2月16日(金) 実地教育推進部門会議(メール審議)
~23日(金) 教員研修推進部門会議(メール審議)
- 2月16日(金) 第104回国立大学教育実践研究関連センター協議会(オンライン)
- 2月19日(月) 教職支援推進部門会議
- 2月20日(火) 第10回専任会議
特別支援教育推進部門会議
- 2月22日(木) 教育開発/ICT推進部門会議(メール審議)
~28日(水)
- 2月29日(木) 2023年度学部・附属学校園教員合同研究会
- 3月1日(金) 第2回センター運営委員会
- 3月11日(月) 第11回専任会議

※その他、実地教育科目(1年次「教職概論」「大学入門ゼミ」/2年次「教育実践プレ演習」/3年次「教育実践演習(教育実習事前事後指導)」/4年次「保育・教職実践演習」等)のコーディネート・指導を行いました。



特集 学部教員と附属学校園教員の協働による研究活動

第23回 学部・附属学校園教員合同研究集会を終えて

副学部長（附属連携担当）高木 由美子



2023年度の研究集会を令和6年2月29日（木）16：20より実施しました。今年度は、植田和也教育研究評議員の主導の下、会を実施いただきました。総務係の藤澤さんをはじめ関係の皆様のご協力のもと無事開催することができましたこと、心より感謝申し上げます。

合同研究集会は、「4年間を通した実地教育の充実と課題」というテーマで実施されました。415教室にて、平篤志学部長先生にご挨拶いただいたのち、全体討議が始まりました。実地教育に係る国の動向と各答申内容、本学の教育実習の全体像と令和5年度の変更点と次年度の方向性について植田実地教育委員長、介護等体験、海外インターンシップについての令和6年度の変更点の解説を小方朋子学務委員長、令和6年度から本格実施される台北日本人学校でのインターンシップについて櫻井佳樹国際交流委員長が登壇・ご説明されました。

2023年度学部・附属学校園教員による共同研究プロジェクトは、昨年に引き続き、教育学部第4期重点項目であるSDGsに関する研究、SDGsに関する教育方法・教育内容、教育実践について2つの募集区分に分けて募集しました。一つは、A区分：学部教育・附属学校園の教育研究開発を支援しそれに貢献するもの、もう一つはB区分：教育実践研究に新たな知見をひらくものについてです。合計9件を採択、研究費を配分し、共同研究を実施、その成果を17：45から個別・ポスター発表にて報告いただきました。研究概要は本誌にもご報告いただきましたのでご覧ください。

19：00から実施された懇親会も対面実施され大変盛況で、学部附属の充実した関係が伺える会となりました。附属学校には学部・研究科と連携し、実践的な実習・研修の場を提供するとともに、先導的な教育モデルを開発し、その成果を公開することが求められています。今後、ますますの相互発展を進めて参りたいと思います。



研究グループ報告

※大学教員は、研究代表者のみ記載。以下同じ。

特別な配慮を必要とする子どもの居場所に関する研究

松井剛太※、附属幼稚園、高松園舎

本研究は、特別な配慮を必要とする子ども【たかや（仮名）】が幼稚園で居場所を見出す過程を担当クラスの担任と加配教員の記述した事例と記録をもとに検討した。その結果、対象児が感情交流をきっかけに、自身の拠り所を物から教師、友達へと広げていく過程が明らかになった。また、そういった過程の中で、担任と加配教員の連携と職員集団の支えが影響していることも示唆された。居場所とは時間をかけて、そこにいる人たちが行きつ戻りつしながら、涵養されていくことが明らかになった。

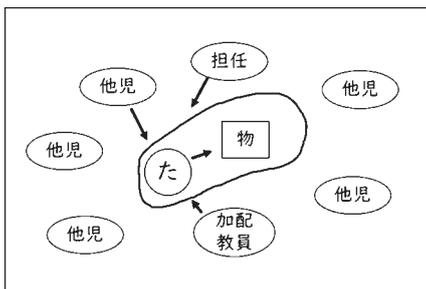
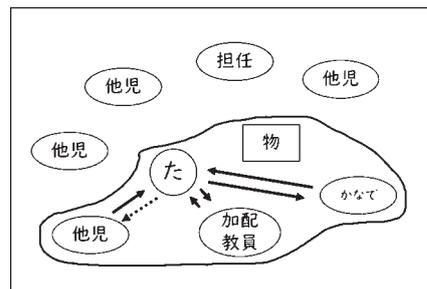


図 物との間で居場所がある



特定の他児が拠り所になる

センター長あいさつ
令和6年度 附属教職支援開発センター 事業計画・令和5年度センター員
学部教員と附属学校園教員の協働による研究活動
研究グループ報告

研究グループ報告

令和5年度 教育実践集中講座 実践報告
教員採用試験に挑む学生に、日々の指導で力添えを。
交流教員から見た学校教育教員養成の今・これから

令和5年度 附属坂出小学校 合同研究集会 報告
国立大学教育実践研究開発センター協議会 報告
附属学校園 この1年 2023
附属幼稚園・附属高松園舎

附属高松小・附属坂出小
附属高松中・附属坂出中
この1年 2023

「誰一人取り残さない」ためのケイパビリティアプローチによる中学校社会科公民学習の授業開発ーヤングケアラー問題を題材としてー

鈴木正行[※]、附属高松中、附属坂出中

本研究では、SDGsの基本理念である「誰一人取り残さない」に基づき、ヤングケアラー問題を題材として、ケイパビリティ・アプローチにより、社会問題の発見及び解決力の育成に資する中学校社会科公民学習の授業開発を行った。具体的には、ヤングケアラーを救うための相談所について、対象を高松市内のヤングケアラーとし、「私たちがSOSを出せる場所はどこにあればよいか」を学習課題として、附属高松中学校1年生を対象に実践した(表参照)。相談所を考える上で、設置する場所、配属する人員、実際に行う内容の三つの点から考察した。本実践は、行政機関と連携して困難な社会的問題の解決をめざすものであり、ヤングケアラーの認知度の拡大だけでなく、学習者の社会参画に向けた取り組みとしても意義のある授業になった。なお、授業内で表れた意見を高松市健康福祉局ことも未来部子育て支援課に提供し、市政に役立てていただくようにした。

生徒が考えた相談所の設置場所

相談所の設置場所候補	1組	2組	3組	合計
県庁・市役所	11	2	5	18
高松市全域	9	22	10	41
小学校・中学校付近	2	4	2	8
小学校・中学校、コミュニティセンター	1	1	7	9
高松市北部・人口集中地点	7	7	6	20
高松市中央部	3	2	1	6
高松市南部	4	5	2	11
オンライン上、電話対応	1	0	0	1
商業施設	1	0	1	2

単位：人

持続可能な社会の形成者の育成を目指す社会科授業の内容開発研究

ー観光客の参加によって伝統文化を保護・活用する営みー

神野幸隆[※]、附属坂出中

昨年度に引き続き「持続可能な社会の形成者の育成を目指す社会科授業を開発した」。網野教諭は小豆島の虫送りを教材化した。本時では「小豆島の中山地区の人々は、なぜ火手(ほて)を有料にしたのだろうか」のめあてを追求した。一般的には「無料ならば多くの観光客が来てくれる」である。ただし、従来、観光客は見学、写真撮影のみの参加であった。「無料なら沢山観光客が来て続くはずなのに、なぜ有料化したのか?」を紐解く必要があった。過疎地域における持続可能な伝統文化継承には「地元住民の維持や保護・保全」だけでは難しい。持続に向けて、担い手の外部からの発掘・創出(交流人口増加)を目指す中山地区の営みが参考となるだろう。SDGs17は「パートナーシップで目標を達成しよう」では、相互の利益を追求し、共同の目標に向けて協力することで、より良い未来を築くと目標設定がなされている。観光客も集落もWIN-WINな関係で祭りを持続していく先進的な取り組みを授業化した。



就学前後をつなぐ保育内容の検討：領域「言葉」から

松本博雄[※]、附属幼稚園、高松園舎

本研究グループでは、幼稚園児と研究協力者である大学生との間で、日常の保育実践を通じて手紙のやりとりを展開するアクションリサーチ「ぶんつうプロジェクト」を令和元年度から継続してきた。本年度はその一環として、学生・幼稚園教諭・大学教員が協働しての成果報告会を昨年度に続いて実施し、①幼-小連携を念頭に置いたとき、保育内容としての「言葉」のありようをどのように考えたらよいか、②それを支える手立てとして何が必要か、の2点を検討した。本プロジェクトでは、幼-小移行期における書き言葉やコミュニケーションの発達過程を捉えること、「書き言葉」を支える保育・教育実践の環境構成・活動設定と教授内容のあり方を考えること、あわせて保育者・教員養成課程の専門科目での学びの一環として、実践的に考えられる場を大学生に提供することをねらいとしている。研究・実践・大学教育をつなぐ本プロジェクトを通じ、今後とも附属学校園と学部との実質的な連携をより強めていきたい。



AIチャットを活用した教材作成

黒田 勉[※]、附属高松中、附属坂出中

近年、AIを巡る開発環境は大きく進歩しており、特にAIチャットと呼称される文章作成ツールの進展がめざましい。学校現場でも、定型的な文書作成において活用することが期待できる。しかし同時に、これらを使用したとき発生する問題点も指摘されている。

そこで、系統的な情報の技術の学習指導の精度を高めるために、AIチャットを活用して教材を開発していく方法と、そのとき発生した問題点を洗い出し、生徒の自学自習に耐えうるようなキーワードの抽出を行っていく。また、生徒に対しては、選択したキーワードによって、生成する文章が変わり、他人の知的財産の侵害にならないようにするための方策を考えていく。また、AIチャットではプログラム作成も可能であるため、「課題の解決のために処理の手順を考えさせることに重点を置くなど、コンピュータを用いた計測・制御に関する技術の目的を意識した実習」のための教材づくりにも活用できないか検討する。

本年度の発表では、各種AIのフォーカスを当て、同じ質問項目に対しての各AIが導出する回答の比較と検討を行い、授業での活用に向けた討議を行って、現場で利用できる状態にあるか否かを、授業に使用できるか否か等について、附属学校の技術科以外の教科を担当する教員と討議を行うことで、AIチャットの活用方法を検討したり、そもそも興味のない教員にも興味を持ってもらい、厚様を考えてもらえる有意義な時間が取れたと考えている。

設問文の例

・系統的な情報の技術の学習指導の精度を高めるために、AIチャットを活用して教材を開発していく方法と、そのとき発生した問題点を洗い出し、生徒の自学自習に耐えうるようなキーワードの抽出(生徒に別れて、選択したキーワードによって、生成する文章が変わり、他人の知的財産の侵害にならないようにするための方策)を具体的に示して下さい。

Geminiの回答(旧Google Bard)

AIチャットは、文章作成や情報検索に非常に有効なツールです。教材作成に活用する際には、以下の点に注意する必要があります。

1. 問題点の抽出: AI生成の文章には、事実誤りや著作権侵害のリスクがあります。生成された文章を精査し、正確性と信頼性を確認してください。

2. キーワードの抽出: 特定のトピックや概念を強調するために、適切なキーワードを抽出し、それに基づいて文章を生成させることができます。

3. 学習指導の精度向上: AI生成の文章を教材の一部として活用し、生徒の理解を深め、学習意欲を高めることができます。

4. 著作権の配慮: AI生成の文章は、著作権フリーであることが多くありません。教材作成に使用する場合は、著作権の侵害を避けるために、適切な許可を得る必要があります。

魅力のある職業 先生になろう。 ～夢と笑顔を大切に作る教師をめざして～

出演 大資・山下 司・日下 哲也

第一期
(4～9月)

[第1回] 5月11日(木) 教育実習事前指導 「私の出会った教育実習生・教育実習に向けてのメッセージ」(山下・日下)	[第5回] 5月29日(月) 学級経営 「学級で育つ子どもたちのために」(日下)
[第2回] 5月15日(月) 生徒指導 「生徒指導の実際について」(日下)	[第6回] 6月3日(土) 教育法規 「教育法規とケース・スタディ③」(出演) 「教育法規とケース・スタディ④」(山下)
[第3回] 5月20日(土) 教育法規 「教育法規とケース・スタディ①」(出演) 「教育法規とケース・スタディ②」(山下)	[第7回] 6月12日(月) 道徳教育 「道徳科の多様な授業づくり ～心を耕す道徳の授業～」(山下)
[第4回] 5月24日(水) 子ども理解 「『子ども理解』と授業実践・附属学校参観の心がまえ」(出演)	

プロの教師とは何か? ～教師になるあなたへのエール～

第二期
(10～3月)

[第1回] 10月13日(金) 教育課題の探究① 「今日の子どもの状況と道徳教育」(日下)	[第9回] 11月27日(月) 教育の最新情報③ 「教育課程と学校評価」(山下)
[第2回] 10月20日(金) 教育課題の探究② 「日本の学力問題」(出演)	[第10回] 11月30日(木) 教育方法と実践 「ICT活用・情報教育のすすめ」(山下)
[第3回] 11月2日(木) 生徒指導・進路指導 ケーススタディ 「中学校の事例を中心に」(山下)	[第11回] 12月13日(水) 人権教育 「学校教育における人権教育 小学校での取組事例に学ぶ」(日下)
[第4回] 11月6日(月) 教育の最新情報① 「教師に求められる力」(出演)	[第12回] 1月15日(月) 学級経営 「学級で育つ子どもたちのために」(日下)
[第5回] 11月9日(木) 教育方法と実践 「ICT活用・情報教育のすすめ」(出演)	[第13回] 1月22日(月) 道徳教育 ケーススタディ 「道徳科の多様な授業づくり ～心を耕す道徳の授業～」(山下)
[第6回] 11月15日(水) 教育実習事後指導 「教育実習を振り返って」(山下・日下)	[第14回] 1月29日(月) 子ども理解 場面指導(ロールプレイ)(日下)
[第7回] 11月16日(木) 生徒指導・進路指導 ケーススタディ 「小学校の事例を中心に」(出演)	[第15回] 1月29日(月) 教育の最新情報④ 「学級で育つ子どもたちのために」(日下)
[第8回] 11月24日(金) 校種別による選択実務研修 「はばだけ若き力を生かして ～4月からの心がまえ～」 小学校(日下)・中学校(山下)	[第16回] 2月5日(月) 子ども理解 場面指導(ロールプレイ)(日下)



出演 先生



山下 先生



日下 先生

教育実践集中講座を終えて

日下 哲也 (日本教育公務員弘済会香川支部支部長/香川大学客員教授)

「子どもの心が分かる教師になりたい」「学級を子どもにとって安心・安全な居場所にしたい」「子どもの小さな問題に気づき、対応できるようになりたい」等。子どものことを思い、具体的な目標をもって受講する学生の姿に、教育の未来に希望を持ちました。教育は子どもの未来に携わる職業です。それは子どもの未来であるとともに、人類の未来でもあります。教職とはそれほど重い責任と魅力をもった職業です。

この講座で学ばれたように教員の仕事は授業を行うだけではありません。私が講義をしただけでも「生徒指導」「学級経営」「道徳教育」「人権教育」等。教員は子どもの学校生活全体を通じて教育を行います。これは日本の教育の特徴です。それだけに教員が学ぶことは多く、多忙を極めます。時代と共に変化することも多く、教員は常に研修を重ね、学び続けなければなりません。指導を通じて子どもと共に成長していく教員。多くの子どもの笑顔にふれ、喜びに満ちた姿を間近で見ると共に喜ぶ教員。そこには喜びもやりがいもたくさんある素晴らしい仕事だと退職してからつくづく思います。皆さんの「夢」に向かって真っすぐがんばってください。私は、テーマに沿いながら現在の香川の学校が課題としている内容について日本全体の課題と結びつけ、自分自身の取り組みも紹介しながら具体的に話そうと心がけてきました。受講生の皆さんが私の話を契機として教育について考えを深めていただければ幸いです。

教員採用試験に挑む学生に、日々の指導で力添えを。～2024年6月、本学教育学部FDより～

植田和也（実地教育委員長）

教員採用試験が近づけば、4年生は不安・迷いなどプレッシャーに押し潰されそうになります。この期間をどう過ごすかが重要です。教員採用試験前の精神的なプレッシャーを乗り越えることが、4月に教師になった時、学校現場の様々なプレッシャーを克服することにも繋がります。大きな環境の変化となる4月を乗り越えることが特に重要です。ゼミ指導などを通して、学生を支えてほしいと思います。その際、先生方に意識して学生指導いただきたいことが4点あります。

まず、教員採用試験の面接指導についてです。これまで教員採用試験対策の際、学生に繰り返し伝えたことは「採用試験は、単なる合格を得るだけではなく、教員として採用された後の人間力を磨くことにもなることを意識して欲しい」ということです。加えて、面接練習の際、一般的によく知られている教育用語を、自分の具体的な経験と繋いで使えるようにご助言いただければと思います。

次に、開始時刻に遅れない習慣を学生自身が身につけてほしいと願います。開始時刻を意識することは、教員採用試験だけではありません。学生が卒業した後、4月に毎日のように開かれる職員会議や現職教育に遅れず参加することは、心の余裕にも繋がります。ある教育関係者の方は、「優秀な学生でも、4・5月に資料の整理保管ができない、時間が守れない学生は心配だ」と言われていました。4月、学校現場では膨大な資料が配られます。それらをファイリングするとか、データを整理するとか。卒業論文指導を通して、データの整理や保管など指導されていると思いますが、それは学生が4月から教員になった時にも重要なのだということを、伝えていただけたらと思います。

3点目に、大切なことは他人任せにしないこと。「自分で確かめる習慣。自分で自分のことに責任を持つ」ことを指導いただければと思います。

4点目は、受験する都道府県のことや教育活動の取り組みについて知り、語るができることです。自身の出身県以外を受ける学生には、受験する県のよさを簡単にでも語れることが大切です。自分の言葉で語るができるようアドバイスいただければと思います。

教員採用試験当日に向かうラストスパートの中で、「自分で自分を信じる力」が求められます。精神的にも行き詰まり、悩みも増えてきます。お互いに友だちと支え合い、ゼミの先生にも支えていただき、学生たちは人間的な成長を一步ずつ進めていくことと願っています。

交流教員から見た 学校教育教員養成の 今・これから

未来の教員へのエール

倉野晴代（交流教員）

私たち3名の交流人事教員は、幼稚園、小学校、高等学校での現職経験を生かし、教員としての実践的な指導力を学生に育成するための教育活動を行っています。

1年生から4年生までに関わる教職実践の授業を行う中、特に授業実践論、生活科授業研究では、子どもや教員、学校の実態と結びつけて話や活動を行うように努めています。学生が子どもや教育について考えるきっかけづくり、また自分自身の課題に向けた学びの追究となることを願っています。

未来の若手教員の力に少しでもなりたい、その思いから教職自主サークル（毎週月6コマ）等の課外活動での面接や模擬授業等、教員採用試験対策のアドバイスをしたり、先輩現職教員との対話の機会を設けたり、協力しています。「教員採用試験合格はスタートライン。そこから、教員の道を拓いていくように…」と、子どもたちと共に、自ら学び続ける意思をもち、歩み続けてほしいという願いのもと、学生にエールを送っています。

未来の一人ひとりの子どもとの出会いやかかわりを大切に、子どもと共に育ち合う人・教員として、他者と協働し、自分の可能性を発揮していくことができるように、応援しています。



多様性の時代に教職を目指す学生に望むこと

川東芳文（交流教員）

授業では、教育課題や実践事例を具体的に取り上げ、理論と実践の接続に努めています。また、教員採用試験に向けた指導や教育相談などを担い、教職を目指す学生をサポートしています。高校教員出身の私は、県内の高校と連携した高大接続推進事業も担当しています。例えば、高校生の探究的に学ぶ力の向上に資するべく、総合的な探究の時間の授業に学生を研究アドバイザーとして派遣しています。

急激に社会が変化し、価値観が多様化する昨今、子どもの背景や特性、抱える困難も多様化しています。教員には、子どもを深く理解し、柔軟に対応することが求められます。その基盤として、豊かな教養と鋭い人権感覚がますます重要になると考えられます。また、カウンセリング・マインドを伴うコミュニケーション能力も不可欠です。これらは、幅広い読書や様々な人との関わり、経験の積み重ねなどにより、じっくりと涵養されるものです。学生には、大学の内外を問わず、人との出会いを大切に、積極的に挑戦すること、そして、複数の視点から考える習慣を身に付けることを望みます。

子どもとの関わりの中で得られる喜びや充実感は何物にも代えがたいものであり、それが教員の魅力だと思います。学生たちが、自信と希望をもって子どもたちの前に立てるようになることを願いながら、日々の指導や支援に携わっています。



附属坂出小学校 合同研究集会報告

令和6年6月17日（月）、附属坂出小学校にて、令和6年度 合同研究集会が開催されました。この研究集会は、附属坂出小学校が主体となり、香川大学教員や県下公立小学校教員を招き、公開授業をふまえて研究の在り方や授業実践について討議を行う、附属坂出小学校の自主研究会として開催しているものです。

当日はまず、13時40分より、第6学年 道徳科「僕が思う、私が思う『リーダー像』」の研究授業が行われました。今回の提案授業においては、道徳の教材をもとにクラスで学び考える授業ではなく、6年生の子どもたち自身の今日的課題「学校のリーダーとして、自分が大切にしたいことを考える」を学習課題として、NHK for Schoolの動画教材も活用しながら、学習活動が進められました。子どもたちは自分の考えを授業支援システム「ロイロノート」のカードにまとめ、仲間のカードを閲覧したり、より詳しく考えを聞きたい友だちのところにタブレット端末を持って行って、考えを直接聞いて議論したりしながら、多様な視点から「リーダーとして、何を大切に考えなければならないか」について、考えを深めていました。

その後、多目的教室に会場を移し、附属坂出小学校の研究理論の説明の後、授業討議が行われました。（→附属坂出小学校の実践研究の概要については、本紙「附属学校園この1年」(10ページ)を参照ください。）参加者は、ピンク色・黄色の2色の付箋紙に「よかった点」「改善点（代案を含む）」を書き出し、表組された模造紙に分類して貼り付けた後、附属坂出小学校の教員が司会者・討議記録者となり、貼られた付箋紙を順に取り上げながら、今回の授業について討議を進めました。学校外から参加した大学教員・公立小学校教員からは、はじめて見聞きする研究実践だからこそ「聞いてみたいこと」や意見が数多く挙げられ、附属坂出小学校教員も含め、気づきの多い研究集会になりました。加えて、司会担当の先生の討議の流れづくりと討議記録の先生による整理された議論の記録板書によって、研究集会後に今一度討議を振り返ることができる、豊かな素材を提供いただいたことも印象に残る研究集会でした。（文責：松下幸司）



令和5年度 国立大学教育実践研究関連センター協議会 報告

センター協議会は、オンライン（Zoom）にて2回開催されました。

■第103回 令和5年9月15日（金）

■第104回 令和6年2月16日（金）

本年度のセンター協議会も、午前のオンライン開催となりました。体制・運営、会計等に係る審議が行われ、その後、各センターからの報告及び意見交流が行われました。おわりに協議会としての今後の方向性について意見が交わされました。

各センターからの報告によると、各大学での役割がより多様になってきていることがわかりました。その中でも、教職大学院、教員研修に係る業務が増えてきているように思われました。

本センターの役割（部門）も増えつつありますが、専任教員を中心に、とりわけ学部の実地教育推進のためのコーディネート業務に尽力しております。学生に求められる新たな資質・能力も増えつつありますが、それに対応できるような実地教育の在り方を探究し、コーディネート業務を遂行していく必要性を再実感しました。

令和6年度より、センター協議会は対面実施になる予定です。今後も、情報交換・意見交流で得られたものを、本センターの運営に生かしていきたいと思っております。（文責：山岸知幸）

附属学校園 この1年 ～2023～

香川大学教育学部の各附属学校園より、2023年度の実践研究の取り組みについて ご報告いただきます。

附属幼稚園

附属幼稚園 研究経過報告

研究主題 **保育を楽しむ保育者を目指して
～資質・能力を育む状況づくりを探る(仮称)～**

1 研究主題について

令和3.4年度より、「保育を楽しむ」ということをテーマに研究を続けてまいりました。本研究は、現在の幼児教育界の最も大きな課題の1つである働き方改革に関連するものです。単純に労働時間を短くすればよいという話ではなく、「保育者の負担軽減」と「保育の質」の両側面から業務の改善に取り組んでいます。さらに、令和5年度より、文部科学省委託研究(全附属幼稚園部会)と併せ、「資質・能力の育ち」を捉える視点から研究を深めています。実践における幼児の具体的な姿から、3つの資質・能力(『学びに向かう力、人間性等』『知識及び技能の基礎』『思考力、判断力、表現力等の基礎』)が一体的に育つ過程を探り、幼小接続につなげていきたいと思えます。

2 研究の内容と今後の研究について

①保育記録及び事例研究

日々の保育記録は、明日の保育を考える上で重要です。また、少し時間を置いて事例に書き起こしてみることで、その時は見えてこなかった子どもの育ちを捉えることができます。これまでも本園が大切にしてきたこうした研究方法は、継続して取り組んでいきます。

②「資質・能力が一体的に育つ過程」の整理

全ての事例において、資質・能力を捉えるのではなく、特に保育者の心に響いた姿(素敵な姿や心に残った姿など)の事例を「資質・能力が育ちつつある姿」として取り上げ、資質・能力の視点から育ちを捉えていきます。また、どのような保育者の関わりや状況づくりが幼児を支えたのか、資質・能力の育ちとの関連性の中で分析していきます。

③幼小合同研究

資質・能力の捉え方・見え方は、幼小の教諭では違ってくると言われています。そこで、幼小合同での事例研究も併せて行い、その違いを明らかにすると共に、双方の捉え方・見え方から互いの教育について理解を深めていきたいです。



子どもの“～したい”を支える環境づくり



附属幼稚園 高松園舎

高松園舎 研究経過報告

研究テーマ 『環境の在り方について考える』
～子どもとともにつくる・考える～

1 研究主題について

子どもたちは豊かな自然環境の中で生活しており、高松園舎には恵まれた環境を生かして創ってきた遊びや文化があります。本年度はサブテーマを「子どもとともにつくる・考える」とし、この先人から受け継がれてきた豊かな環境について再考するとともに、教師の子ども観や保育観について問い直し、幼稚園における環境の在り方について探っていくこととしました。

2 研究内容と成果

本年度は、教師が「環境」というものを改めて意識した保育を展開することに努めました。また、「子どもとともに」という視点の大切さを再確認し、幼児の主体的な姿を支えられるような環境づくりをしました。事例検討を通して、幼児一人一人の思いをより丁寧に見取ろうとする教師の変容につながっています。



「見て!大きな泥団子ができたよ!」
～経験させたいこと、幼児の思いが相まった環境～



「砂と水を混ぜると固くなるんで!」
～教師が、園舎の豊かな環境のもつ特性について熟考する～



「アイスください」「コーンですか?」
～幼児の“あしたい、こうしたい”を保障した環境づくり～



「チャボの卵が生まれた!」
～環境に関わる中で教師自身も心揺さぶられ成長する～

3 今後の研究課題

園舎として大切にしてきた“育てたい幼児像”に還っていたか、経験させたいことを保障できる保育内容だったかを振り返り、指導計画の見直しを行っていきます。

令和6年度 附属教職支援開発センター 事業計画・令和5年度 センター 日誌
学部教員と附属学校園教員の協働による研究活動
研究グループ報告

研究グループ報告

令和5年度 教育実践集中講座 実践報告
教員採用試験に挑む学生に、日々の指導で力添えを。
交流教員から見た学校教員養成の今・これから

令和5年度 附属坂出小学校 合同研究会 報告
附属学校園 国立大学教育実践研究開発センター協議会 報告
附属学校園 この1年 2023
(附属幼稚園・附属高松園舎)

附属学校園 この1年 2023
附属高松小・附属坂出小
附属高松中・附属坂出中

① 研究主題について

本校はテーマを「分かち合い、共に未来を切り拓く子どもの育成」とし、研究を進めてまいりました。これからの先行きが不透明な社会では、価値観や年齢の違い、初めて会った人とも分かち合いながら、未知の問題を解決するために新しい知や価値を生み出すことが必要となると考えます。私たちは、どんな時代、場所、集団においても、夢や憧れをもち自律的に学ぶ力、「ひと・もの・こと」への共感的・協同的に関わる力、問題を解決し、知や価値を創造する力等を発揮しながら、仲間と共に最適解を探っていける子どもこそが、研究テーマに掲げる人間像であると考えています。

② 研究内容について

本校は、令和4年度より4年間、文部科学省研究開発学校の指定を受けました。研究課題は、『個の生活知を豊かにする新領域「経験」と、体験を価値の創造につなぐ「じぶん」の時間を創設し、経験から新たな知や価値をつくる教育課程に関する研究開発』です。

新領域「経験」は、2つの小領域で構成し、異学年集団で活動を行います。

第1小領域の「はっけん」の時間は、教科学習の土台となる時間です。この時間では、異学年集団で多様な「ひと・もの・こと」の出会いを通して、学問につながる個の生活知を豊かにすることを目指します。「はっけん」の時間での経験は、教科学習での知識と有機的につながり、知を再構成していくことに効果的に働きます。

第2小領域の「ちょうせん」の時間は、社会とつながったプロジェクト活動を通して、うまくいかない経験や成功した経験を味わいながら、生き方・在り方につながる豊かな経験をつくります。

また、「じぶん」の時間は、体験をもとに、同学年集団で議論を深め、価値の創造を目指す時間です。価値の尺度が劇的に変化するといわれる不透明な時代の中、他者との協働により、既存の知識や価値から新しい価値を生み出していくといったプロセスは、これからの社会に合った新たな価値創造のかたちになり得ると考えています。

さらに、教科学習では、経験領域で豊かにした経験を生かして、実感を伴った学習内容の理解を図ることで、学習後に身の回りの捉え方がこれまで以上に豊かになると考えています。

これらの成果を、初等教育研究発表会（令和6年2月1日、2日）で公開を致しました。多くの参会者を得て、地域教育の拠点校として、研究開発学校として全国に発信ができたと考えています。

③ 今後の研究について

新しいカリキュラムのもとで、子どもたちが生き生きと学習に取り組む姿が発信できるよう、成果と課題を整理し、よりよいものになるよう、今後も研鑽を深めていきたいと思えます。



【「ちょうせん」の時間】

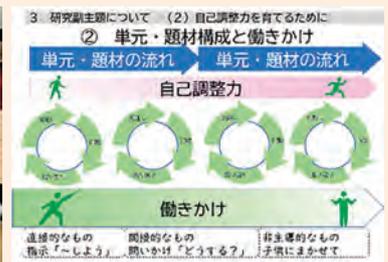


【教科学習】

研究主題 **多様な他者と共に、自ら学びを進める子供の育成**
—自己調整力を育てる学習の展開—

1 目指す子供の姿

本校では、自ら学び続ける子供とは、「自ら目標に向けて情熱をもち、様々な問題の中から解決すべき課題を見だし、他者と適切に関わりながら様々な方法で取り組み、自らの学びを正確に捉え、今後の学習や生活に活かそうとする子供」の育成を目指し、研究を行うこととしました。自分はどのように学んでいくのか、学び方は適切だったのか等、自己の学び方を自ら確認したり、学びを自分で振り返ったりすることを大切にされた考え方、自己調整学習を手掛かりに研究を進めることとしました。



2 成果と今後の展望

自己調整力を育てる学習研究を始めて、1年目。授業実践を重ねていくことで、自己調整とは何か、どのように子供が学習している姿が自ら学びを進めている姿であるのか、大学の専門家等のご助言をいただきながら、研究を深めているところです。



これまで行った実践を基に、私たちが目指す「自ら学びを進める子供」「自己調整しながら学びを進める子供」とは何かを明確にできるように、来年度も引き続き、本研究主題を置き、令和7年1月31日（金）の研究大会で成果をご覧いただけるように研鑽して参ります。



第104期 教育研究発表会のご案内
多様な他者と共に、自ら学びを進める子供の育成
～自己調整力を育てる学習の展開～



令和7年1月31日(金) 15時～17時
香川大学教育学部附属坂出小学校

附属高松中学校

本校の研究について



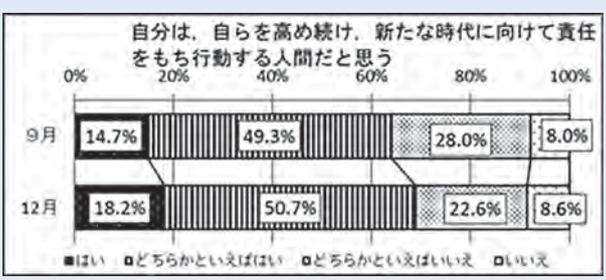
研究主題 **自らを高め続け、新たな時代に向けて責任をもち行動する人間の育成**
—知性を育み、省察性を高めるカリキュラムを通して—

今年度は、4年ぶりに研究発表会を対面で開催し、また文部科学省研究開発学校の指定を受け、研究を進めてきました。

研究主題は、昨年度と同様「自らを高め続け、新たな時代に向けて責任をもち行動する人間の育成」と定め、新たに知性と省察性を育む新領域「MIRAI (Make Innovation through Reflection And Intelligence. 訳：省察性と知性によって新たな価値を創造する)」を設置したカリキュラムを開発し、実践しています。

教科学習では、各教科の知性を育むために、各教科ならではの面白さや魅力、その教科を学ぶ意義の実感につながる知のプロセスに参加する「教科する教科学習」を実践しています。また、MIRAIでは、地域や社会に働きかけるプロジェクトや個人による探究活動を行い、その活動の中で自己の生き方・在り方を問い直し、調整することで、知性と省察性を育むことを目指しています。

その結果、目指す生徒像に近づいた生徒の姿やアンケート結果の変容が見られました。



附属坂出中学校

本校の研究について

研究主題 **生涯にわたって学び続ける生徒の育成**
—実感・自己理解としての「語り」が生まれる情意へのアプローチ—

本校では、「自立した学習者の育成」をめざし、生涯にわたって学び続ける意欲やその基盤となる力の育成を中心に実践研究を継続しています。これまで、「ナラティブ・アプローチ¹としての「語り」の研究を継続しつつ、「ものがたり」の授業²を提案してきました。今期は、前回大会の成果と課題を踏まえ、特に子どもの情意面と学びの文脈に着目し、教師がどのように関わることが、子どもたちの学ぶ意味や価値の実感と自己理解につながるのかを追究しています。また、「共創型探究学習 (CAN・シャトル)」では、異学年による探究活動を通して、各立場 (見習い・弟子・師匠) が生み出す意識や能力の高まりを調査するとともに、仮説に重点を置いた教師のかかわりとその効果について、研究を進めています。他にも、答えのない問いを子どもと教師がともに考える「語り合いの時間」など、新たな取り組みも行っております。本年6月に行われる研究発表会にて、教育研究の成果をぜひご覧になってください。



【自分の考えを熱心に伝えようとする姿】

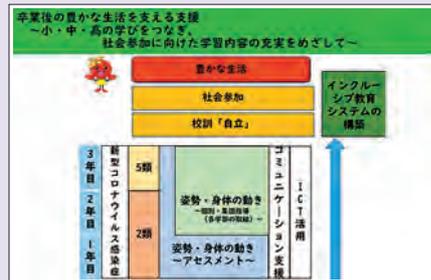
日時 令和6年6月7日 (金) 9:00~16:35
 内容
 ○全体提案 ○共創型探究学習CAN提案 ○共創型探究学習CAN生徒発表
 ○公開授業 (各教科・語り合いの時間) ○教科、学校保健提案・教科研究協議会
 ○シンポジウム・講演 慶應義塾大学教職課程センター教授 鹿毛 雅治 先生 本校教員数名

¹ ナラティブ (語り、物語) という概念を手がかりにしてなんらかの現象に迫る方法。(野口裕二『ナラティブ・アプローチ』勁草書房、2009) 本校は、振り返りを語りの視点からとらえなおす自己理解法ととらえている。
² 「ものがたり」の考え方を取り入れた授業で、他者との語り合いの中で、学んだことを過去の経験と関係づけ、筋立てが変わり、学ぶことの意味や価値を実感していく授業

研究主題 卒業後の豊かな生活を支える支援

～小・中・高の学びをつなぎ、社会参加に向けた学習内容の充実をめざして～（3年研究3年次）

1. 研究主題等について 本校の校訓は「自立」です。自立とは、尊厳ある人と認められて、周囲のサポートも得ながら、自分らしく生きることと本校では定義しています。また、豊かな生活とは、尊厳ある人と認められて、周囲のサポートも得ながら、自己選択・自己決定できる幅を広げ、主体的に様々な活動に参加して自分らしく過ごす生活のこととしています。中央教育審議会の答申「令和の日本型学校教育」の構築を目指してや国連からの日本への勧告等社会的背景があり、これらは障害のある人たちが社会に参加するためのキーワードです。これらの観点から社会参加をテーマにして、本校の児童生徒を見てみると、自己肯定感を高めること、知的側面の伸長を図ること、身体の動きを育てること等が必要だと思われ、本研究では豊かな生活につながるための一側面として、身体の動きに着目して研究を進めました。



2. 研究内容とその成果 本研究では、主に次の4つの取組を行いました。①姿勢・身体の動きについての取組～作業療法士との連携を通じて～②各学部のインクルーシブ教育システム構築に向けて特別支援学校で何ができるかを考えた取組③小・中・高の学びをつなぐ学習内容の検討④児童生徒啓発のためのFacebookやInstagramによる児童生徒の様子や支援・手立て等についての発信です。その取組んだ成果を第21回教育研究発表会にて発表いたしました。6年ぶりの対面式の研究会を行い、本校の研究の成果を発信するとともに、県内外からの多くの参加者よりご意見・ご感想をいただくことができました。今後もインクルーシブ教育システム構築に向けて、特別支援学校で何ができるのかを考えた取組を研究として続けていく予定です。



小学部：体育



中学部：生活単元学習



高等部：総合的な探究の時間

教育実践総合研究（第50・51号）原稿募集

『香川大学教育実践総合研究』第50号は2024年11月29日（金）原稿受付締切、第51号は2025年5月30日（金）原稿受付締切予定です。以下投稿要領をご参照の上、奮ってご投稿ください。

香川大学教育実践総合研究投稿要領

1（投稿の要領）

香川大学教育実践総合研究（以下「教育実践総合研究」という。）への投稿については、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、この要領の定めるところによる。

2（投稿の内容）

教育実践総合研究は、教科教育、教育臨床など広く教育実践に関する独創的な研究論文・実践報告、資料（研究ノート、研究動向の紹介など）及び香川大学教育学部附属教職支援開発センターの活動報告などを掲載する。

3（投稿者）

教育実践総合研究に投稿できる者は、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、香川大学教育実践総合研究編集会議（以下、「会議」という。）が特に依頼した者とする。

4（投稿原稿の提出方法）

投稿原稿は、完成原稿とし、原則として電子文書で作成し、印刷原稿2部と、その電子ファイルを会議に提出する。

5（投稿原稿の長さ）

投稿原稿の長さは、刷り上がり12頁（1頁は24字×44行×2段）以内を原則とし、偶数頁になることが望ましい。超過する場合は、会議の議を経て認めることがある。

6（刷り上がり1頁目の形式）

刷り上がり1頁目は、和・英文のタイトル・著者名・所属（所在地）、和文要旨（200字）及びキーワード（5語）を含むものとする。

7（投稿原稿の取り扱い）

投稿された論文等は査読を行い、会議においてその取り扱いを次のいずれかに決定する。査読者については、会議において決定する。

(1) 採録 (2) 条件付き採録 (3) 返戻

8（校正）

校正は原則として3校までとし、投稿者において速やかに行うものとする。その際、印刷上の誤り以外の訂正、挿入、削除は原則として認めない。

附則 本要領は、平成16年4月1日から適用する。

附則 本要領は、平成17年12月14日から施行し、平成17年11月9日から適用する。

附則 本要領は、平成19年4月1日から施行する。

附則 本要領は、平成27年4月1日から施行する。

附則 本要領は、令和3年12月20日から施行し、令和3年6月1日から適用する。

香川大学教育学部附属教職支援開発センターニュース
(No.12)

発行日 令和6年10月1日 代表者 松村 雅文

教職のかゆいところに手が届く。

香川大学教育学部 附属教職支援開発センター

〒760-8522 香川県高松市幸町1-1

Tel.087-832-1683 Fax.087-832-1689

http://www.ed.kagawa-u.ac.jp/~j-cen/

